

# 留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題： — 日本語教育における文献調査より —

高橋 雅子・平山 紫帆

---

**Abstract:** This paper studied previous research to see how research on “learning motivation” had been conducted in the area of Japanese language education in the past. Papers to be studied were collected by searching CiNii Articles with “learning motivation” and the “Japanese language” as the keywords, thirty papers of which were analyzed in terms of “definition of learning motivation,” “contents,” “subjects of study,” “research and analytical methods,” and “application of study results.” It has turned out from the study that research on learning motivation in the area of Japanese language education likely conducts quantitative questionnaire surveys on university students and aims to precisely elucidate learning motivation. As for the situation in which the current Japanese language education is put, building a structure to accept foreign students towards the “300,000 Foreign Student Project,” providing English-medium programs for university globalization that allow foreign students to acquire credits and graduate or complete their programs, and the lack of a need for them to learn Japanese thereby can be pointed out. In the future, studies and research on learning motivation would possibly be necessary that are conducted on foreign students who do not need to learn Japanese although studying in Japan, considering the situation of the current Japanese language education.

**Keywords:** 学習動機、日本語学習者、留学生

---

## 1. はじめに

文部科学省は2008年に「留学生30万人計画」を策定した。これは、2020年までに日本で学ぶ外国人留学生を30万人に増やすことを目指したもので、日本を世界に開き、ヒト・モノ・カネ・情報の流れを拡大する「グローバル戦略」の一環として位置づけられている。

この計画は、留学生増加のための方策として、大学のグローバル化を狙った「英語のみによるコースの拡大」を推進しており、現に国内の大学および大学院では、英語による単位取得、卒業・修了が可能なコースが次々に誕生している<sup>1)</sup>。そしてその結果、日本に留学してはいても、日本語学習を必要とせず、日本語を学習しない留学生が増加している。

しかし、その一方で、研究や学問をする上で必要なくとも、日本での滞在期間中に日本語を学習し始める留学生は少なくない<sup>2)</sup>。したがって、留学生を受け入れる大学は、そうした留学生のニーズに応えることが求められている。だが、日本語の習得に重きを置く留学生と、単位取得上日本語を必要としない留学生とでは、日本語学習に費やすことのできる労力や時間が異なるであろうし、日本語学習を行う動機や目的も異なることが予想される。したがって、効率的で効果的な日本語教育を行うためには、彼らの状況やニーズを十分に検討しなければならない。その中でも特に、「学習を開始し維持するエネルギー」(倉八 1992)である学習動機は、学

習を継続させる上で非常に大切な要因であり、日本語の単位取得が不要な留学生には特に重要であると考えられるため、それについてよく把握しておく必要があるといえる。

そこで本稿では、日本語が不要な留学生の学習動機の解明の第一歩として、これまで日本語教育において「学習動機」がどのように研究されてきたのかについて、先行研究を調査することにした。

## 2. 調査方法

本稿では、日本語学習者の学習動機に関する先行研究を調査対象とする。先行研究の収集には、CiNii Articles を用いた。「学習動機」、「日本語」をキーワードとして検索したところ、57本の論文が検索された。そのうち、口頭発表用の資料や海外の雑誌等で入手困難なもの、日本語母語話者を調査対象としたものを除いた31本を調査対象とする。対象論文を「学習動機の定義・範囲」、「論文の内容」、「調査対象者」、「調査手法、分析手法」、「調査結果の応用」という観点で分析を行う。

## 3. 調査結果

### 3.1 学習動機の定義・範囲

学習動機については、ほとんどの論文が先行研究をまとめる形で定義付けを行っている。

「調査対象論文一覧」の33番：縫部ほか(1995)では、日本語学習動機を「外発的動機」と「内発的動機」に分類した。「外発的動機」には「道具的動機」、「統合的動機」、「誘発的動機」があり、「内発的動機」には「好奇心・関心」、「モデルとの同一視」、「仲間との相互作用」があるととした。

「調査対象論文一覧」の7番：大西(2010)では、動機づけを「人間の行動の方向と規模を決めるもの」と定義し、学習動機は環境によって影響を受け、変化する動的なものと捉えている。

「調査対象論文一覧」の8番：夏(2010)では、従来の日本語学習動機の研究は道具的動機と統合的動機に二分されており、学習者の複雑な学習動機を反映していないことを指摘し、学習動機の分類をさらに緻密化する必要性を述べている。また、従来の調査は学習動機の実態を明らかにすることに留まっている点を指摘し、日本語学習動機と日本人イメージのとの関連についての調査を行った。

「調査対象論文一覧」の4番：根本(2011)では、学習動機はプロセスを持つものとし、日本語学習開始以前から捉える必要があるとしている。

### 3.2 論文の内容

対象となる31本の論文の内容は、以下の5つに大別された。

- 1) 日本語学習者の学習動機そのものを明らかにすることを目的とする内容
- 2) 日本語学習者の学習環境や、その国の日本語教育事情などを明らかにすることを目的にし、その一つとして学習動機に触れている内容
- 3) ある項目と学習動機の関連性を見るために調査をした内容
- 4) 学習の動機付けの要因を明らかにするために調査をした内容
- 5) 別の目的で調査・実践を行い、その結果として学習動機に関連する項目が出てきた内容  
上記の5つの内容ごとに分類した結果を図1に示す。

「1) 日本語学習者の学習動機そのものを明らかにすることを目的とする内容」が12本と一番多く、全体の38.7%を占めた。次に多かったのが、「2) 日本語学習者の学習環境や、その国の日本語教育事情などを明らかにすることを目的にし、その一つとして学習動機に触れている内容」と「3) ある項目と学習動機の関連性を見るために調査をした内容」の7本で22.6%であった。「4) 学習の動機付けの要因を明らかにするために調査をした内容」は2本で6.5%、「5) 別の目的で調査・実践を行い、その結果として学習動機に関連する項目が出てきた内容」は2本で9.7%であった。

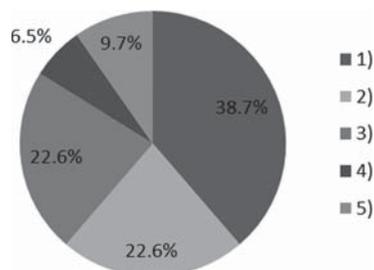


図1 論文の内容

### 3.3 調査対象者

対象となる31本の論文のうち調査をしていないものが1本あった。この1本を外した30本の調査対象者について分析を行う。

海外で調査をしたものは18本で全体の60.0%を占め、一方、日本国内で調査をしたものは12本で40.0%となっている(図2)。

調査対象者の所属は大学生・大学院生が22本で73.3%を占め、次いで一般社会人・日系企業に勤務する会社員と年少者(とその保護者)が2本ずつで6.7%であった。研究者、教師、日本語学校の学習者、日本語センターで学ぶ学習者がそれぞれ1本で3.3%となった(図3)。

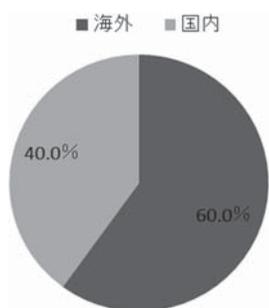


図2 調査対象(海外、国内)

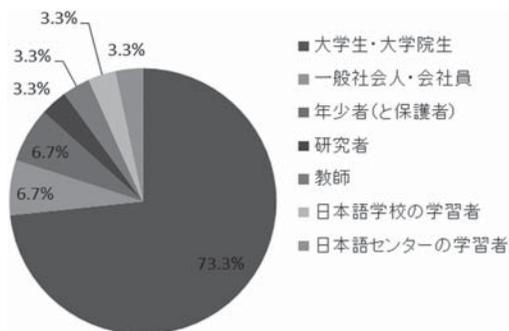


図3 調査対象者

### 3.4 調査手法、分析手法

次に調査方法と分析手法について分析する。対象とする31本の論文のうち、調査を行わなかった1本を外し30本の論文の調査方法と分析手法について分析する。

まず、調査方法は質問紙による調査が15本で最も多く全体の半分を占めた。インタビューによる調査が9本で30.0%、質問紙調査とインタビュー調査の両方を行ったものが1本で3.3%であった。また、質問紙調査とテストを行ったものが3本で10.0%、インタビュー調査と観察、質問紙調査と観察がそれぞれ1本で3.3%であった(図4)。

質問紙による調査は自由記述形式のものと、4~6段階で回答する形式<sup>3)</sup>のものがあつた。

インタビュー調査は半構造化インタビュー<sup>4)</sup>の形式をとっているものがほとんどで、エピソードインタビュー<sup>5)</sup>を行っているものが1本<sup>6)</sup>あつた。

テストによる調査は3本とも発音に関するものであつた。単語・文・文章を学習者が読み日

本語母語話者が自然さを判定するもの、長母音の知覚をテストするもの、オーラルテストから発音を見るものであった<sup>7)</sup>。

次に、データ収集や分析手法を見る。量的手法を用いたものが20本で全体の66.7%を占めた。質的手法を用いたものが8本で26.7%、量的手法と質的手法の両方を用いたものが2本で6.7%あった(図5)。

質的な分析としては、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach: M-GTA)<sup>8)</sup> や KJ 法<sup>9)</sup> の手法を取っているものがあった。

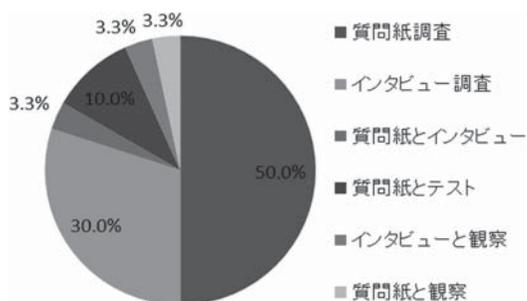


図4 調査方法

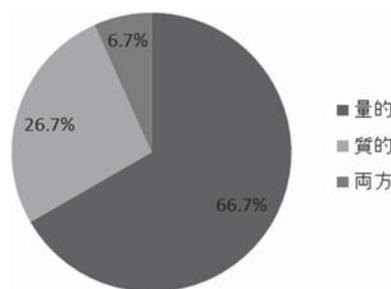


図5 分析手法

### 3.5 調査結果の応用

3.2で述べたように、調査対象の論文のほとんどは、学習動機を明らかにすること、学習環境や日本語教育事情を明らかにすることなどが主な内容であった。その一方で、学習動機を明らかにし、その結果を日本語教育の教室活動や学習者の支援につなげる提言をしているものもあった。

「調査対象論文一覧」の7番：大西(2010)では、日本語学習動機についてウクライナの大学生180名を対象に自由記述による質問紙調査を行い、学年ごとに分析した。その結果、低学年の学習者は「挑戦志向」を、高学年は「活用志向」を持っていることが明らかになった。このことから、教師は日本語の使用機会を増やし、学習者の挑戦意欲を満たすような課題を用意し、達成可能な目標を持つような支援をすることを提案している。

「調査対象論文一覧」の10番：中井(2009)では、日本に留学した中国人就学生で、日本語クラスが再履修になった学生を対象にインタビュー調査を行った。学習動機に影響を与える要因を抽出し、学習動機の低下を防ぐために教師ができる具体的な方策を提言した。

「調査対象論文一覧」の14番：近藤ほか(2008)では、フランス、イングランド、オセアニア諸国の大学の日本語学習者1,105名を対象に日本語学習の意識調査を行った。調査結果はそれぞれに異同があるが、結論として留学生を受け入れる大学と送り出す大学間での情報交換と教育の連携の必要性を述べている。

「調査対象論文一覧」の21番：原田(2004)では、バンコクの日系企業に勤務するタイ人日本語学習者を対象に調査を行い、今後の課題として調査結果をビジネス・ジャパニーズのシラバス、カリキュラムの作成に活かすとしている。また、日本への留学・研修の必要性とそのため奨学金制度、企業内短期研修、大学と企業の連携の実施の必要性にも触れている。

## 4. 考察

CiNii Articles を用いて、「学習動機 日本語」をキーワードとして検索し収集した 31 本の論文の傾向を以下に述べる。

収集した論文で使用している学習動機の定義と範囲は、先行研究に倣っているものがほとんどであり、各論文で差が見られなかった。その一方で、大西（2010）では学習動機を環境によって影響を受けるものと定義していることや、根本（2011）では学習動機はプロセスを持つもので日本語学習開始以前から捉える必要性を述べていることに注目したい。本稿の「1. はじめに」でも述べたように、世界情勢の変化に伴い日本語教育を取り巻く環境も日々変化している。学習動機はある一時点のみの調査結果を結論とするのではなく、時代背景や学習者の環境をも考慮した調査が必要なのではないだろうか。

内容については、日本語学習動機そのものを明らかにすることを目的とした論文が3分の1以上を占めた。このことから学習者の学習動機については多くの教師・研究者にとって関心のある事柄であると言えるのではないだろうか。

調査は、海外で行われているものが多く 60% を占めた。対象国は中国、カタール、ウクライナ、ドイツ、タイ、ロシア、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなどさまざまである。国際交流基金が 2009 年度に実施した「2009 年海外日本語教育機関調査」の結果によると、現在 133 か国で日本語教育が実施されている。このことから、各国の日本語教育事情の報告の一環として学習目的や学習動機に関する調査が今後も様々な国で行われると考えられる。調査の対象者は、大学生・大学院生が 70% と多くを占めている。これは、日本国内では大学で日本語を学ぶ学習者が多いこと、調査や研究が行いやすい教育機関であることが要因であると考えられる。

調査方法に関しては、質問紙による量的調査が最も多く、次いでインタビュー調査が多く行われていた。また、質問紙とインタビュー調査、質問紙とテスト、インタビューと観察など、複数の調査を行っているものもあった。その国・地域、教育機関の全体の傾向を見るには質問紙による量的調査が適しているからであろう。

調査結果の応用については、教師による学習者の支援の方法について提言しているものが見られたが、数としては多く見られなかった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、日本語が不要な留学生の学習動機の解明の第一歩として、これまで日本語教育において「学習動機」がどのように研究されてきたのかについて先行研究を調査した。調査から、日本語教育における学習動機に関する研究は、学習動機の解明そのものを目的にし、大学生を対象に量的な質問紙調査を行う傾向があることが分かった。

また、日本語教育において学習動機に関する研究は多くなされているが、その一方で、日本に留学しながらも日本語学習を必要とせず、日本語を学習しない留学生の増加という現状を反映している研究は、今回の調査対象論文には見当たらなかった。

今後は、日本に留学し日本語が不要な環境にいながらも日本語の学習を始めた学習者を対象とし、彼らの状況を把握したうえで、学習動機についての縦断的調査を行うことを課題にした。

## 参考文献

- ウヴェ・フリック (2002) 『質的研究入門—(人間科学)のための方法論—』春秋社
- 倉八順子 (1992) 「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連—」『日本語教育』pp.129-141, 日本語教育学会
- 国際交流基金 (2011) 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』国際交流基金
- 平山紫帆 (2013) 「教室での学習内容と実践をつなげる活動案—サバイバル日本語コースでの試み—」『立教大学ランゲージセンター紀要』第29号, pp.43-50, 立教大学ランゲージセンター
- 南博文 (1995) 「KJ法」小川一夫監修 (1995) 『社会心理学用語辞典』p.74, 北大路書房

## 調査対象論文一覧

	論文タイトル	著者	雑誌名	ページ	発行年	発行所
1	香港の年少者日本語学習に関する一考察—保護者の意識を中心に—	木山登茂子, 野村和之, 望月貴子	国際交流基金日本語教育紀要 (8)	53-69	2012-03	独立行政法人国際交流基金
2	日本語学習者の日本語使用状況に関する調査: 「社会的文脈」「他者の存在」「自己の形成」という3つの観点から捉える	菅智穂	日本語教育方法研究会誌18	36-37	2011-09	日本語教育方法研究会
3	工学系大学院留学生を対象とした日本語学習動機調査	麻生迪子, 竹口智之, 太田和秀	工学教育研究講演会講演論文集23 (59)	650-651	2011-08	公益社団法人日本工学教育協会
4	カタールにおける日本語学習動機に関する一考察: LTI日本語講座修了者へのインタビュー調査から	根本愛子	一橋大学国際教育センター紀要2	85-96	2011-07	一橋大学
5	多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育: 中国大連市における第二外国語としての日本語教育	加納陸人	文学部紀要24 (2)	1-21	2011-03	文教大学
6	語彙習得を目指す読解の協働的学習の活用	藤井みゆき	同志社大学日本語・日本文化研究 (9)	80-94	2011-03	同志社大学日本語・日本文化教育センター
7	ウクライナにおける大学生の日本語学習動機	大西由美	日本語教育	82-96	2010-12	日本語教育学会
8	中国における日本語専攻学習者の日本人イメージ—日本語学習動機との関連を中心に	夏素彦	言語文化と日本語教育 (39)	112-121	2010-07	お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
9	科学技術研究者の日本語学習動機に関する調査	長戸三成子	日本語教育方法研究会誌17 (1)	46-47	2010-03	日本語教育方法研究会
10	中国人就学生の学習動機の変化のプロセスとそれに関わる要因	中井好男	阪大日本語研究	151-181	2009	大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
11	ドイツにおける日本語学習者の学習動機—大学生を対象としたナラティブ・インタビューに見る	田村知佳	言語文化と日本語教育 (36)	64-67	2008-11	お茶の水女子大学日本言語文化学研究会

12	日本語アクセントの学習における自己モニターの有効性：タイ語母語話者に対するアンケートの分析から	スイリボンパイブーン ユパカー	音声研究 12 (2)	17-29	2008-08	日本音声学会
13	台湾における日本語学習者の学習動機と学習困難度について	劉, 欣雲	言語文化と日本語教育 35	120-120	2008-07	お茶の水女子大学日本語文化学研究会
14	日本と海外の日本語教育機関の教育連携の模索－短期交換留学プログラムの学習者アンケートから	近藤安月子, 丸山千歌, 東伴子	小出記念日本語教育研究会論文集	69-82	2008-03	小出記念日本語教育研究会
15	日本語学習者のコミュニケーション意欲と学習動機の関連	小林明子	広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域 (57)	245-253	2008	広島大学大学院教育学研究科
16	留学経験は学習動機にいかに関わっているか：「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化	原田登美	言語と文化 12 (0)	151-171	2008	甲南大学
17	発音学習動機・ストラテジーと発音評価	神山由紀子	日本語教育方法研究会誌 14 (1)	52-53	2007-03	日本語教育方法研究会
18	日本語長母音知覚と個人要因：韓国人学習者の場合	木下直子	日本語教育方法研究会誌 14 (1)	10-11	2007-03	日本語教育方法研究会
19	年少者日本語教育における「文脈化」を考える－学校支援と家庭支援の実践から	古賀和恵	早稲田大学日本語教育実践研究 (3)	33-42	2005	早稲田大学大学院日本語教育研究科
20	上級中国人学習者の日本語学習に対する意識と成功への鍵：インタビュー調査からの考察	白杵美由紀	上越教育大学研究紀要	531-543	2005-03	上越教育大学
21	バンコクの日系企業の求める日本語ニーズに関する分析：ビジネスパーソンによる日本語学習動機との比較から	原田明子	早稲田大学日本語教育研究	169-181	2004-09	早稲田大学
22	意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討：アジア系留学生の場合	一二三朋子	教育心理学研究	175-186	2003-06	日本教育心理学会
23	ロシア語圏における日本語教育支援環境整備に向けて：モスクワ市、アルマトゥイ市、ウラジオストク市での基礎調査	稲垣滋子, 土井眞美, 仲矢信介	群馬大学留学生センター論集	15-37	2003-03	群馬大学
24	PA73 在日留学生の日本語習得(1)：日本語学習動機と日本語能力	杉本明子, 黒沢学	日本教育心理学会総会発表論文集	—	2000	日本教育心理学会
25	留学経験が日本語学習動機におよぼす影響－米国人短期留学生の場合	高岸雅子	日本語教育	101-110	2000-04	日本語教育学会
26	イギリスの公教育における日本語教育	山本もと子	信州大学留学生センター紀要	63-74	2000-03	信州大学

27	能動的な教室活動は学習動機を高めるか	三矢真由美	日本語教育 (103)	1-10	1999-12	日本語教育学会
28	日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討	小河原義朗	言語科学論集	1-12	1998-11	東北大学
29	日本語学習動機と成績との関係ータイの大学生の場合ー	成田高宏	世界の日本語教育・日本語教育論集	1-11	1998-06	独立行政法人国際交流基金
30	大学生の日本語学習動機に関する国際調査ーニュージーランドの場合	縫部憲源, 狩野不二夫, 伊藤克浩	日本語教育学会	162-172	1995-07	日本語教育学会
31	EC 諸国における日本語教育ー学習動機・目的を中心として(ヨーロッパにおける日本語教育ーEC 諸国を中心に)	富田隆行	日本語教育学会	1-10	1985-10	日本語教育学会

#### 註

- 1) 立教大学大学院経営学研究科国際経営学専攻 (MIB) では全科目が英語で展開されており、日本語を学習せずとも大学院が修了できるようになっている。
- 2) 立教大学では、来日時に日本語が未習で、かつ、帰国後に日本語を学習することが難しい学習者を対象とし、日本滞在中に必要な最低限の日本語を習得させることを目的とした、サバイバル日本語のコース (J0 コース) を提供している (平山 2013)。2013 年度後期におけるこのコースの履修者は 16 名である。
- 3) 「調査対象論文一覧」12 番 (スィリボンパイブーンユパカー 2008) では、「全く当てはまらない」から「最も当てはまる」の 4 段階評価で回答を求めた。30 番 (縫部ほか 1995) では、「1= 大賛成～5= 大反対」の 5 段階評価で回答を得た。9 番 (長戸 2010) では、「1= “Strongly Disagree” から 6= “Strongly Agree” まで」の 6 段階評定によって調査を行った。
- 4) 半構造化インタビューとは、予め設定しておいた質問項目への回答に加え、回答者に自由に話させて得た発話をデータとして収集する面接手法である (ウヴェ 2002)。
- 5) エピソードインタビューとは、回答者の日常生活における特定の経験やその状況を具体的に語ってもらい、回答者がそれらの事象にどのような意味づけを行っているかを探る面接手法である (ウヴェ 2002)。
- 6) 「調査対象論文一覧」11 番 (田村 2008) がインタビュー調査でエピソードインタビューを行っている。
- 7) 「調査対象論文一覧」17 番 (神山 2007)、18 番 (木下 2007)、28 番 (小河原 1998) の論文がテストによる調査を実施した。
- 8) グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、データに基づいた理論構築を目指す質的研究法である (ウヴェ 2002)。
- 9) KJ 法とは、質的データを帰納的に分類・統合する手法であり、多面的なアイデアを既成の概念にこだわらず、帰納的に新しい概念や仮説へと組み上げていくという特徴を持つ (南 1995)。